

都道府県番号	25
都道府県名	滋賀県

【 】

*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

学校名	彦根市立旭森小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	4	4	4	2	26	35
児童数	132	132	127	132	129	123	4	779	

研究の概要

(1) 研究主題

『生きる力を基盤とした、確かな学力の育成』
 一個のよさを生かし 自らの生き方をつくり出す基礎・基本の確実な定着－

(2) 研究主題設定の趣旨

「確かな学力」とは
 本校では、基礎学力のみを『確かな学力』にとらえているのではなく、「学校内外で出くわす課題に対して、問題解決できる力」を『確かな学力』であるととらえている。全教育課程を『確かな学力』を育てる場として位置づけ、すべての教育活動において、「子ども自身が課題を見いだし、問題解決できる」力を身につけたいと考えている。「この活動で子どもに育てようとした力は何か」「この活動で本当に力がついたのか」という点で全教育課程における評価をくり返そうとしてきた。

「確かな学力」のみとり
 具体的な研究を進めるにあたり、「確かな学力」を次の3つの面からとらえようと考え、研究を進めることとした。

『確かな学力』を、授業場面というポイントでとらえてみとる。

『確かな学力』を、家庭・地域の広がりでとらえみとる。

『確かな学力』を、育ちの道すじから、発達課題としてとらえみとる。

研究の概要（選択した観点を中心に記述すること）

(1) 研究推進体制の工夫

少人数指導の実践と評価

1年 複数指導による国語・算数の内容の定着
 2年 TT指導から少人数指導へ（国語・算数）
 3～6年 少人数指導（国語・算数・理科）
 補充的指導、発展的指導の方法の検討
 体験的な活動の推進

(2) 研究の実際

5年 国語科 「わたしたちはこう考える」

単元目標 ・話し合いの基本的事項についての知識（司会などの役割、議事の流れ、提案と提案理由の発表の仕方、発言の仕方など）をもち、自分たちの学校生活上の問題を解決するために議題の重要性、緊急性や時間などを考慮して計画的に話し合うことができる。（話す・聞く力）

本単元の学習で育てる力

自分の立場をはっきりさせ、話し合うことができる力

5, 6年の「話すこと・聞くこと」に関する目標は「目的や意図に応じ、考えた事や伝えたい事などを的確に話すことや相手の意図をつかみながら聞くことができるようにするとともに、計画的に話し合おうとする態度を育てる」となっている。5年生の実態を考えた時、「計画的に話し合おうとする」ことは難しく、自分の考えをはっきり述べるのが精一杯である。そんな5年生に、本単元でどのような力をつけていくことが必要かと考えた時、「全員が話し合える」ようにしていくことが大切であると考えた。

ところで、「話し合う」とは、どのような姿を考えればよいのであろうか。一方的に自分の考えを話しているだけでは、「話し合う」とは言えない。また、話す子と聞く子がはっきりと分かれてしまっても、「話し合う」ということにはならない。やはり、友だちの意見をもとにして考えが高まったり、友だちの考えを聞いているうちに自分の話したいことが見つかったりし、それを発言できるようになることが必要であろう。また、友だちの意見や考えをもとにするとはいえ、自分は賛成しているのか、それとも反対しているのかという自分の立場をはっきりさせておくことも話し合いを効果的に進めていく上で大切なことである。このように考え、単元で育てたい力を「自分の立場をはっきりさせて、話し合うことができる力」と設定した。

以上のことをもとに単元構成を考えた。まず「自分の立場をはっきりさせる」とは、賛成・反対を述べるだけでなく、なぜそう考えたのかという理由づけができたり、質問されたときに答えられたりすることが大切であると考えた。また「話し合う」とは、「話す」ことと「聞く」ことがうまく関わっていく必要があると考えた。「友だちの意見に関わらせて話す」＝「話し合う」ととらえて、子どもたちの実態と照らし合わせてみたとき、次の4つのグループが見えてきた。

- a 「話す」「聞く」の両方が得意な子ども
- b 「話す」のは得意だが、「聞く」のは苦手な子ども
- c 「聞く」のは得意だが、「話す」のは苦手な子ども
- d 「話す」のも「聞く」のも両方が苦手な子ども

発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発

高学年になると、子どもたちの個々の身につけている力には、かなりの個人差がある。

今回の「話し合う」という一面を見ても、常に積極的に話し合いに参加できる子からなかなか発言できずに、聞くことが多くなる子まで様々である。このような個人差に対応できる少人数指導として、「めざす姿」別の学習を仕組んだ。

「話す」ことも「聞く」ことも得意な子どもたちは、ディベートを取り入れた学習を展開し、「話す」「聞く」の両方を同時に高めていく学習を展開する。発展的な学習として「計画的に話し合う」ことも意識して取り組んでいく。

「話す」「聞く」のどちらかを苦手に行っている子どもたちには、スキルの学習を取り入れて苦手意識をなくしていく。その際、「楽しい」「おもしろい」という思いをもたせることが大切と考え、ゲーム的な要素のある内容を取り入れる。

		話 す	
		「話す」得意 「聞く」苦手	「話す」得意 「聞く」得意
聞 く		「話す」苦手 「聞く」苦手	「話す」苦手 「聞く」得意

「話す」ことも「聞く」ことも苦手な子どもたちは、まず「聞く」ことから始める。確実に聞き取る力をつけることで、「話す」内容をもつことができると考えたからである。その上で、「話す」事にも苦手意識をもっているので、「話すことって、おもしろい、簡単だ。」という思いをもてるようゲーム的な要素を取り入れていくようにする。

子どもたちは、学級のオリエンテーションの中で、本単元で学習する内容、学習の仕方について説明を聞き、これまでの自分の「話す」「聞く」点について自己評価を行う。

自己評価をもとにして、自分の「めざす姿」を設定し、「めざす姿」に近づくために

最も適したコースを選ぶ。個々の子どもたちが「自分は、ここでどんな学習をしていくのか」をはっきりともてているので、子どもたちのニーズに応じて指導をしていくことができる。

(3) 研究の成果と課題

単元の導入から、子どもたちは「自分のめざす姿」を思い描き、その姿に近づくために「自分はどこで学習するとよいか」と考えてグループを選択した。グループ選択の段階から、主体的に学習に取り組めるようにと構想したので、多くの子どもたちが意欲的に取り組むことができた。「話すことに自信がついた」「話すことってそんなに難しくはない」などの感想をもつ子が多かったのは大きな成果である。何より、「めざす姿」をはっきりともって努力すれば力が伸びると子どもが実感として感じることもできたのでこの学習には意義があったと考えている。

少人数指導を考える上で、「育てたい力」のしぼり込みをすることの重要性がはっきりしてきた。1単元の学習は数時間に過ぎず、その中で多くのことを指導していくことは困難である。「この単元でどうしても子どもたちに身につけさせたい力は何か」を見極めることで、指導の方向性が見えてくる。

現在の子どもの実態、指導要領の目標をもとにして、「育てたい力」をはっきりさせることで、指導内容ははっきりと決まってくる。「育てたい力」に近いところまで身につけている子どもたちには、より発展的な内容を指導し、「育てたい力」に至るまでに課題があると考えられる子どもたちには、スモールステップを組んで補助的な内容を用意することが必要となる。このように単元を構成することで、よりきめ細かな指導が可能になってくるものと考えている。

(4) 成果の普及の方策

- ・授業研究会には関係校園に参加を呼びかけ理解を得ている。
市内の小学校との研究内容の交流も行い、互いに成果と課題を交流している。
- ・国語・算数・理科の主任会において実践の紹介をするなど普及に努めている。

(5) その他(その他特色ある取組等がある場合に記述)

- ・本年度は、少人数指導の可能性を探るという意味でいくつかの取組みをしてきた。
国語科では、昨年度より「話す力」「書く力」を育てるためにどのような少人数指導が有効であるかを話し合ってきたが、本年度は「読む力」を育てるための少人数指導を模索している。教科書の読み物教材を題材として、どのような「読む力」をこの学年で身につけなければいけないのか研究している。
理科では、遊び体験・既習経験の量(質)によって、子どもの学習への取組みの様相が違うのではないかと考えてコース設定の検討を続けている。

次の項目ごとに、該当する個所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	学級以下 13～18学級 25学級以上	7～12学級 19～24学級		
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	TTによる指導 その他		
【研究教科】	国語 生活 体育	社会 音楽 その他	算数 図画工作	理科 家庭
【指導方法の改善に関わる加配の有無】	有	無		

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント】

「話す力・聞く力」を身につけることを目標に、子ども自身が「めざす姿」をもって学習コースを選択する国語科の少人数指導の事例である。